

家族社会学における性的少数者研究の学説史化への試み

○志田 哲之（早稲田大学）

家族社会学において、同性愛をはじめとした性的少数者について言及することは、今日別段特異なことではない。それどころか近年においては、社会学の中でも家族社会学は性的少数者に対して積極的な研究を行なっている領域であるとも考えられる。そして管見によれば、社会学におけるジェンダー・セクシュアリティ研究の領域において性的少数者に関する研究が盛んになる以前から、家族社会学は性的少数者、なかでも同性愛についての言及を行なってきた古い歴史を有しているともいえる。むしろ、ひとつの研究として取り込まれる前者の研究と、ひとつの研究の中での言及に留まる後者の研究を同じ水準として評価することは困難であるものの、注目が行われていたといった点においては他の社会学領域に較べるとかなり古いものだとはいえるだろう。

本報告では、このような家族社会学における性的少数者研究の歴史を辿り、学説史化を試みることを目的とする。これを試みるにあたっては、まず性的少数者に関する家族社会学の論文を年代別に挙げていくことを行なう。とはいえ、研究活動とは論文にのみ表れるものではないことはいうまでもない。たとえば本学会においては、2002年の第12回大会シンポジウムにて「現代社会における結婚の意味を問う」といった全体テーマのもと、「同性間パートナーシップ試論」のタイトルでセクシュアリティ研究に従事している風間孝による報告が行われたり、2013年に刊行された『家族社会学研究』第25巻第2号においては「レズビアン・ゲイ・トランスジェンダーと『家族』」といった特集が生まれ、3本の論文が収録されるなど、学会活動にもまた目を配る必要があるといえる。

ジェンダー・セクシュアリティ研究領域において性的少数者に関する研究が盛んになる時期を1990年代中葉と定めるなら、家族社会学は1980年代中葉に、すでに海外での家族の新しい動向として同性カップルに言及を行なっている（またそれ以前にも家族病理学的な観点から同性愛への言及も行われている）。1990年代に入っても継続的に複数の研究者から同性カップルへの言及は行われてきた。2000年代に入ると、海外研究の言及に留まらず、日本の非家族社会学者が行なったライフヒストリー研究の調査結果をもとに、同性愛者の結婚観に関する論考を依頼するなど、食欲ともいえる関心のありかたが認められる。この食欲さについては上述の2002年の第12回大会シンポジウムに風間孝を招聘したことからも見てとれるだろう。また2000年代には家族社会学者からの論考も見られるようになる。2010年代に入ると家族社会学者による研究がさらに行われるようになるが、2010年代に入るとよりテーマが具体化していく。たとえば三部倫子は定位家族との関係を、コー・ダイアナと釜野さおりは母娘関係を、そして神谷悠介は仕事や家事、家計、ワークライフバランスをといったようにである。

三〇年余にわたる研究を考察する試みは、正直なところ、報告者の手に余るとも考えている。この間、研究の第一線から退かれてしまった先達や、新たに研究の世界に入ってきた研究者もおり、そして家族や性的少数者の社会における動向、研究の動向も大きく変わったと考えられるからである。報告にあたっては、フロアにお越しいただいたみなさまから、多くの助言をたまわれればと願っている。